審査員の紹介

池田澄子

「豈」同人・「船団」同人
句集・『たましいの話』『拝復』など。

小西昭夫

子規新報編集長・愛媛新聞文芸特集「俳句」選者
著書に『花綵列島』『ペリカンと駱駝』
『小西昭夫句集』等がある。

松本勇二

愛媛県現代俳句協会会長
海程同人・吟遊同人

八木　健

俳句美術館創立名誉館長
滑稽俳句協会会長
八木健のCATV俳句主宰

受賞者の発表

大賞

もぎたての柿をゴディバの紙袋

山本　賜

【講評】　高級チョコレートの紙袋に入れた瞬間に、柿は高級果物になった。
古新聞に包んだ柿と比較すれば大違いだ。自分は魔術師みたいだ。
それが可笑しい。人命にも、国家の命運にも無関係なところに「詩」が存在する。

特選

秋灯にのぞき見らるる読書かな
金澤　健

【講評】
読書している作者が秋灯に覗かれている。
一見、ミステリアスな句だが、秋灯を擬人化すればこういうことになる。読書に限らず、私たちはいつも誰かに覗かれているのである。

土起し小汗が清し秋の昼
松崎宗浩

【講評】
「汗」は夏の季語、「秋の昼」と二つの異なる季節の季語が使われているが、「小汗」は「秋」の季語として表現したのだろう。そこに「作者の自在」がある。働いてかく汗の清しさを素直に詠んでいる。

智は力なり一房の黒葡萄
東　良子

【講評】
黒葡萄には智慧が詰まっている。そして智慧は全ての活動を統御する根幹である。智は力と断言しているのが佳い。俳句は対象に対峙して脳裏に浮かんだことを書くのが基本である。とすればこの句は基本に忠実である。

とんぼうの群れ飛ぶ中のひとりかな
今城夏枝

【講評】
作者の身の回りをとんぼが群れている。群飛ぶとんぼは楽しいだろう。それに比べてと作者は自身の孤独を嘆いた。そして次の瞬間に群れを外れるとんぼを見つけたのだ。とんぼにも自分と同じ孤独な奴がいるのだと。

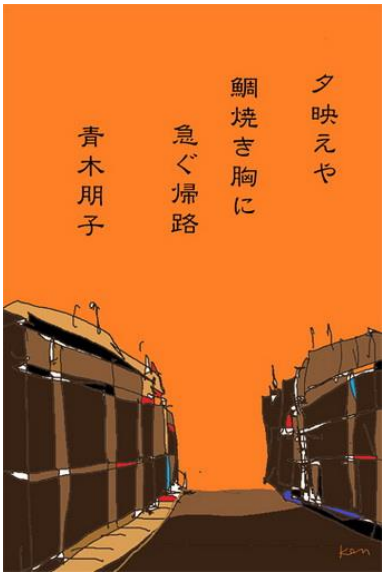
秀逸

今にして父の一言冬の雷

久松久子

【講評】

寡黙な父に叱られた記憶。それは冬の雷にも似て短くその時だけのことだった。作者の胸深く仕舞われた記憶のひとことは、今にして重く大切な叱言だった。今、その父に報いることが出来ぬ。慟哭あるのみである。



夕映えや鯛焼き胸に急ぐ帰路

青木朋子

【講評】

鯛焼きは冬の季語である。買った鯛焼きの温かさを胸に抱いての帰路は楽しい。待つ家族のもとに急ぐ弾む気持が句の中にある。夕映えの景とともに印象的な思い出なのだ。

ロケットに背を向けてゐる蜻蛉かな

久我正明

【講評】

ロケットは現代の文明の象徴。とんぼも同じく空を飛ぶものだが、性能に大きなひらきがある。ロケットは今のところは大部分は軍事目的である。蜻蛉を擬人化することでロケットへの嫌悪感を描いた文明批評である。

父の日の父は無理してスパゲッティ

山本　賜

【講評】

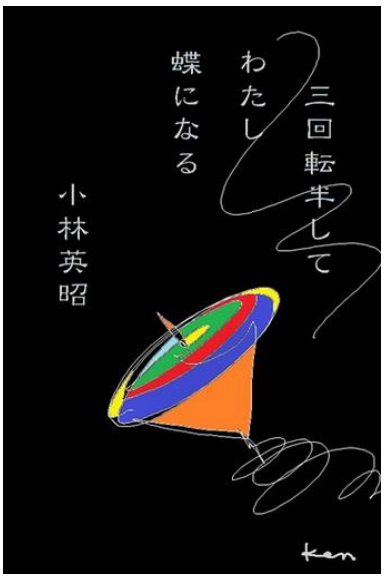
父の日だから、父の好きな料理にすればよいものを句の中の父は「子ども優先」となっている。いまや、父は子どもたちに迎合する時代なのである。少子化の結果なのか。父権喪失の時代を捉えて可笑しい句となった。

とんぼうの指一本の指定席

三野公子

【講評】

「指定席」がよろしい。この指はとんぼの指定席。とんぼへの敬意溢れる句である。常識人は「指を指定席」などとは言わぬ。一見非常識に見えるが、素直に生きるとこういう優しい句ができる。



三回転半してわたし蝶になる

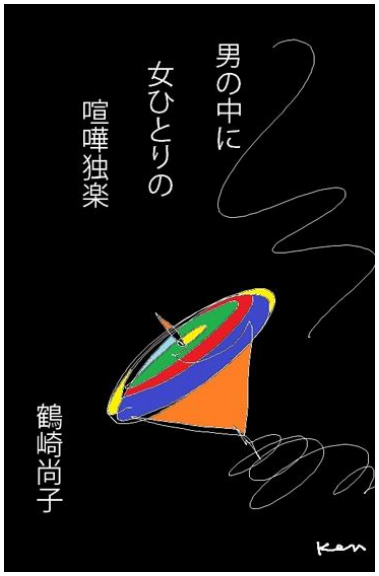
小林英昭

【講評】

「三回転半」には「三行半」(みくだりはん)が隠されている。 三行半は離縁状である。江戸時代に女性は離縁されたが現代の女性はこの独楽のように自ら美しい蝶になって飛びたつのである。

審査員賞

池田澄子賞



男の中に女ひとりの喧嘩独楽
鶴崎尚子

【講評】
回っている独楽が一個だけ描かれていました。添えられたこの句は、その独楽の説明を一切していません。絵の周囲に居る複数の男性と一人の勝気で可愛い女性が、声まで聞こえそうに、言葉でくっきりと描かれています。
（池田澄子）

小西昭夫賞

青春の一瞬にして冷し酒
山口　徹

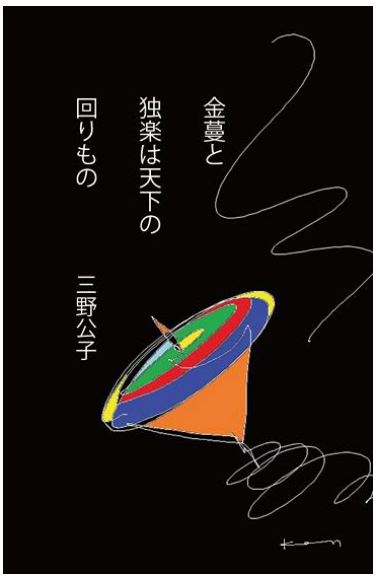
【講評】
酒の絵に酒の句というのはちょっと不満ではあるが、「冷し酒」であるところがいい。「冷し酒」を飲みながら振り返る「青春」はまさに「一瞬」だが、その「一瞬」こそが永遠であることに思い至ったのでもあろう。
（小西昭夫）

松本勇二賞

引つぱれば水流れます烏瓜
小林英昭

【講評】
赤く熟れた烏瓜を引っ張ると水が流れると感得した感覚の冴えをまずは称えたい。中七の「ます」は「けり」に等しいほどの切れを伴いながら現代性をも獲得している。

八木健賞



金蔓と独楽は天下の回りもの
三野公子

【講評】
金蔓という俗っぽさの溢れる言葉を使ったのがいい。天下の回りものは、「宵越しの金は持たない」とした江戸っ子の楽天から生まれた言い方である。独楽という

俳句は創作であるということが良く分る好句。
（松本勇二）

回りものを、金蔓の仲間に仕立てた軽妙がいい。
（八木健）